

令和元年6月24日現在

機関番号：34526

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16471

研究課題名(和文) 生徒の心理的成長促進へ向けた運動部活動における指導方略の検討

研究課題名(英文) Students' psychological growth in high school athletic clubs: Role of students' perceptions of teacher

研究代表者

松井 幸太 (Matsui, Kota)

関西国際大学・人間科学部・講師

研究者番号：40739489

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、運動部活動において生徒の心理的成長を促進させるための指導方略を検討することである。生徒の心理的側面に対して指導者が指導行動をとるかということよりも、生徒と指導者がどのような関係であるかということが大きな要因となりうることから、生徒の心理的成長を促進する指導者の関わりについて、受容的な関わりと統制的な関わり、そして親和的信頼関係の観点から検討を行った。結果より、親和的信頼関係が高く、受容型の指導者像を認知している場合に、生徒の心理的成長(依存性、自己決定性、オーバーコミットメント)が最も促進されることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、運動部活動を取り巻く問題が頻発しており、特に指導者と生徒との間で起こる問題は、年々増加傾向にある。指導者と生徒の双方にとって、身体的にも心理的にも負荷の高い運動部活動においては、生徒の健全な心身の発達に寄与する指導方略の構築が急務である。本研究は、生徒と指導者の関係に着目し、どのような関係において指導者の関わりが生徒にどのように伝わり、生徒の心理的成長にどのように寄与しているかについて、指導現場に即した形で詳細に検討を行った。こうした本研究からの知見は、研究者のみならず、運動部活動に携わる指導者に対しても有益な情報を提供すると考えられる。

研究成果の概要(英文)：We aimed to examine students' psychological growth in combination with students' perceptions of their teacher in high school athletic clubs. Result of study showed the effects of teachers' feedback on students' intrinsic motivation changed by students' perceptions. It's not about what kind of feedback is not important; from who is important. Study suggested what is important for intrinsic motivation is not what kind of feedback, but what kind of relation. Result of study showed students' psychological aspects changed by students' perceptions of teachers. In the acceptance-control group, students were dependent, motivative and overcommitment, while it was the opposite in nonacceptance-noncontrol group. In the control group, students were dependent. In the acceptance group, students were adaptive. These studies could discuss students' psychological growth in combination with students' perception of their teacher emotionally and functionally.

研究分野：臨床スポーツ心理学

キーワード：運動部活動 生徒と指導者の関係 依存性 自己決定性 オーバーコミットメント 心理的成長

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 運動部活動における生徒の心理的成長に関する課題

学校教育の一環として行われる運動部活動では、生徒の身体的・技術的成長だけでなく、心理的・社会的成長が期待されている(文部省, 1997)。しかし、近年の運動部活動では、スポーツとしての競技化が進み、勝利や記録を求めて活動している傾向がある。運動部活動の指導者には、勝利追求者としての役割と教育者としての役割の両方が求められるが(久保, 1998)、教育的な役割よりも競技的な役割に比重が置かれるにつれて、指導者は競技としての即座の結果を求めるあまり、じっくりと育てる指導よりも、早急に教え込む指導に傾いてしまいがちになる。こうした管理的な指導や統制的な指導の中で、子ども達が指示待ち状態と呼ばれるような依存的態度となり、自分で考える、自分で工夫する、自分で判断するといった自発性や独創性が育まれにくいことが指摘されている(永島, 2002)。

(2) 機能面からみた指導者の関わりと生徒の依存性との関連

上記のような問題意識から、指導者の関わりと生徒の依存性との関連について次のような検討が行われている(松井, 2012)。指導者の受容的な関わりと統制的な関わりとの2側面について生徒に尋ね、それぞれの高低をもとに生徒と指導者の関係を4つに分類した。すなわち、指導者の受容的な関わりが多く、統制的な関わりが少ない指導者像を受容型、反対に統制的な関わりが多く、受容的な関わりが少ない指導者像を統制型、受容的な関わりと統制的な関わりがどちらも多い指導者像を両高型、どちらも少ない指導者像を両低型とし、各指導者像における生徒の依存性の特徴について検討している。結果より、指導者の受容的な関わりを多く認知している生徒のほうが、依存の程度が低く自立的であった。反対に、指導者の統制的な関わりを多く認知している生徒のほうが、未成熟な依存欲求が強いことが示されている。

(3) 指導行動と生徒の心理的反応に関する課題

スポーツ場面における指導者の言動が子ども達の心理的側面へ与える影響について、特に内発的動機づけに関しては、指導者の称賛や励ましと正の関係にあり、注意や叱責および無視と負の関係にあることが示されている(Amorose & Horn, 2000; Black & Weiss, 1992; Hollembeak & Amorose, 2005)。しかし、実際の指導現場では、褒めたことでやる気を失うこともあれば、逆に叱ったことでやる気を引き出されることも報告されている(Horn, 1985; 名取, 2007; 吉川・三宮, 2007)。つまり、指導行動に対する生徒の反応や指導効果に関しては一定の見解が得られていないと考えられる。

(4) 指導者に対する情緒面からみた指導行動と生徒の心理的反応との関連

上記の課題を受け、指導者の言動それ自体ではなく生徒と指導者との関係によって、生徒の反応の仕方が決まってくるという仮説を検証する研究が行われた(松井, 2014)。結果より、生徒の内発的動機づけに対する指導者のフィードバック行動の影響は、生徒と指導者の親和的信頼関係によって異なり、指導者がどのようなフィードバックをするかということよりも、生徒と指導者がどのような関係であるかということが大きな要因であることが示された。

(5) 現在の課題

以上より、先行研究では、指導者の受容的な関わりと統制的な関わりという指導行動の機能面が生徒の依存性に関連があることや、指導者に対する情緒面が指導行動の受け止め方を左右し、内発的動機づけに寄与していることが示されている。しかしながら、これらはそれぞれ単一の側面から検証が行われており、実際の指導場面では、指導者に対する機能面と情緒面のどちらか一方だけが作用しているわけではなく、常に双方が密接に関与しながら生徒に影響を与えていると考えられる。

2. 研究の目的

そこで本研究では、機能面と情緒面から統合的に生徒と指導者の関係を捉え、それぞれの関係パターンにおいて指導行動と生徒の受け止め方および心理的成長について検討することを目的とした。そして、生徒の心理的成長促進のための部活動指導へ向けた提言を行うことを目標とした。

3. 研究の方法

本研究は、運動部の指導者に対する機能面と情緒面から統合的に生徒と指導者の関係を捉え、指導行動と生徒の受け止め方および心理的成長との関連について、主に質問紙調査に基づき検討を行った。まず、運動部所属の高校生に対する質問紙調査を行い、指導者の受容的な関わりと統制的な関わり、および親和的信頼感の3尺度の高低に基づき、生徒と指導者の関係を8パターンに類別した。次に、生徒の内発的動機づけおよび依存性、自己決定性、オーバーコミットメントといった心理的側面について、生徒と指導者の関係パターンごとの特徴を整理した。それぞれの特徴より、生徒の心理的成長を促進させる効果的な部活動指導や配慮すべき留意点について提言を行った。

4. 研究成果

本研究では、生徒と指導者の関係を機能面と情緒面から統合的に捉え、それぞれの関係パターンごとに指導行動と生徒の受け止め方および心理的成長について検討することを目的とした。そして、生徒の心理的成長促進のための部活動指導へ向けた提言を行うことを目指し、以下の

一連の研究を行った。

(1) 生徒の心理的側面に影響を与えている指導者の関わりに関する文献研究

まず、生徒の心理的側面に影響を与えている要因について先行研究をもとに検討したところ、指導者の存在に関する言及が多いことが確認された。特に、生徒の内発的動機づけに対しては、指導者がどのようなフィードバック行動をするかということよりも、生徒と指導者がどのような関係であるかということが大きな要因であることが示されており、生徒と指導者の関係の重要性が示唆された。そして、生徒と指導者の関係については、指導者の受容的な関わりと統制的な関わりをもとにした機能面からの検討と、指導者に対する親和性や信頼感などの情緒面からの検討がそれぞれに行われており、今後これらを統合した生徒と指導者の関係の捉え方が求められていることが確認された。

(2) 運動部活動における生徒の心理的課題に関する文献研究

次に、運動部活動における生徒の心理的課題について先行研究をもとに検討したところ、以下の3点が課題となっていることが明らかとなった。1点目は、勝利至上主義の雰囲気の中で指導者の管理的な指導による生徒の依存的態度である。2点目は、本来自主的な参加を前提とする運動部活動ではあるが、周囲の人間関係を意識した他者との関わりの中で自己の欲求の表現が制限される傾向にあり、自己決定の在り方が課題となっている。3点目は、運動部活動に対するオーバーコミットメントと心身への影響である。

(3) 本研究における質問紙調査の概要

以上より、本研究の調査では、これらの観点から生徒の心理的成長に焦点を当て、生徒と指導者の関係の在り方との関連を検討していく必要があることが示された。質問紙調査は、運動部活動所属の高校生を対象に、内容について実施した。

生徒に対する指導者の関わり

指導者の受容的な関わりと統制的な関わりとを尋ねる14項目に対して、生徒に5件法で回答を求めた。

指導者に対する親和的信頼感

生徒が指導者に対して好意的な感情と信頼感を抱いていることを示す20項目をに対して、生徒に5件法で回答を求めた。

生徒の指導者に対する依存性

状況に応じて人にうまく頼ることのできる自立的な意味での「統合された依存性」と、指導者に対していわゆる“依存的”な状態を示す「依存欲求」と2つの依存性に対してそれぞれ5項目計10項目に対して、生徒に5件法で回答を求めた。

運動部活動に対する参加動機の自己決定性

The Sport Motivation Scale (Pelletier et al., 1995)を参考に、「無動機づけ」から、順に「外的調整」、「取り入れ的調整」、「同一化的調整」、「内発的動機づけ」までの参加動機を3項目ずつ計13項目に対して、生徒に5件法で回答を求めた。

オーバーコミットメント

部活動に対して過剰に専心するあまり部活動以外の日常生活において支障をきたしている可能性を含むものであり、部活動希求性、部活動以外への興味関心の欠如、競技性の追求の3つの観点から、それぞれ2項目ずつ作成し、計6項目に対して生徒に5件法で回答を求めた。

(4) 生徒と指導者の関係パターンごとの生徒の心理的特徴

生徒と指導者の関係パターンを同定するため、生徒に対する指導者の受容的な関わりと統制的な関わり、および指導者に対する親和的信頼感の3尺度それぞれの得点の高低を基準に分類し、生徒と指導者の関係パターンを3要因2水準の組み合わせによる8パターンに分類した。すなわち、指導者の受容的な関わりと統制的な関わりとの尺度得点の高低により、指導者の受容的な関わりが多く、統制的な関わりが少ない指導者を受容型、反対に統制的な関わりが多く、受容的な関わりが少ない指導者を統制型、受容的な関わりと統制的な関わりがどちらも多い指導者を両高型、どちらも少ない指導者を両低型と4パターンに分類したのち、各指導者に対する親和的信頼感の尺度得点の高低により各関係パターンをさらに二分することで、最終的に生徒と指導者の関係パターンを8パターンに分類することができた。そして、それぞれの関係パターンにおける生徒の心理的側面について、生徒の依存性、自己決定性、オーバーコミットメントの観点から、その特徴を以下の通り、整理した (Figure1)。

第1に、受容型の指導者像を認知している生徒の場合、指導者に対する依存性に関しては、統合された依存性が比較的高く、依存欲求が低かったことから、指導者に対して過度に依存的になりすぎることなく、自己の判断基準をもちつつも、必要に応じて指導者に相談したり、頼ったりすることもできる自立的な態度であると考えられる。また、参加動機の自己決定性に関しては、自律的動機が比較的高く、他律的動機は低かったことから、周囲を意識した他律的な動機よりも自らの意思決定による自律的な動機により、運動部活動に参加していると思われる。そして、オーバーコミットメントも高くなく中庸を示していたことから、過度に専心しすぎることなく、部活動以外のことにも適度に開かれた状態にあるといえる。したがって、受容型の指導者像を認知している生徒は、指導者に対する依存性も成熟した形で発達しており、受容的な雰囲気の中で自らの参加動機によって適応的に運動部活動に取り組んでいると考えられる。

第2に、統制型の指導者像を認知している生徒の場合、指導者に対する依存性に関して、統合された依存性は低く、依存欲求が高いことから、いわゆる“依存的”で未成熟な依存性に特徴

づけられているといえる。また、参加動機の自己決定性に関しては、自律的動機も他律的動機もともに低く、オーバーコミットメント傾向もみられなかった。したがって、統制型の指導者像を認知している生徒は、指導者に対して依存的な態度に特徴づけられ、指導者からの評価を気にしたり、指導者の指示通りに動いたりといった消極的で受身的な活動となっている様子うかがえる。そのため、自分自身で考え判断したり、意欲的に自主的な活動をしたりすることが課題となっていると考えられる。

第3に、両高型の指導者像を認知している生徒の場合、指導者に対する依存性に関しては、統合された依存性と依存欲求がともに高いことから、両方の依存性が混在しており、指導者に対する未熟な依存性も顕在であるが、自立的な態度も身につけつつある発達過程の生徒に多い依存の在り方であると考えられる。また、参加動機の自己決定性に関しては、自律的動機と他律的動機がともに高かったことから、自らの興味関心により自律的に部活動に参加しているが、他者からの評価や期待がさらなる活動への動機づけとなっている様子うかがえる。自律的な参加動機も他律的な参加動機もともに高く、その取り組みはオーバーコミットメントとなっている可能性が高いと考えられる。したがって、両高型の指導者像を認知している生徒は、指導者に対する依存性も高く、運動部活動に対する意欲も高いことから、指導者との心理的に近い距離感を保ち、自分自身の興味関心や周囲からの後押しによって部活動に対して過剰なほどに専心している様子うかがえる。

第4に、両低型の指導者像を認知している生徒の場合、指導者に対する依存性に関しては、統合された依存性も依存欲求もともに低かったことから、指導者への依存的関わりが少なく、指導者との関係が希薄である様子うかがえる。そのため、自立の前提である依存的関係が課題となっていると考えられる。また、参加動機の自己決定性に関しては、自律的動機づけも他律的動機づけもともに低く、オーバーコミットメント傾向もみられなかった。したがって、両低型の指導者像を認知している生徒は、消極的な活動となっており、自分自身で考え判断したり、意欲的に自主的な活動をしたりすることが課題となっている点では、統制型の指導者像を認知している生徒と同様であるが、指導者に対する依存欲求も低いことから、運動部活動からの離脱の可能性が最も高いパターンであると考えられる。

以上のように、それぞれの生徒と指導者の関係パターンごとに、生徒の心理的成長に合わせた特徴と留意点を提示することができた。

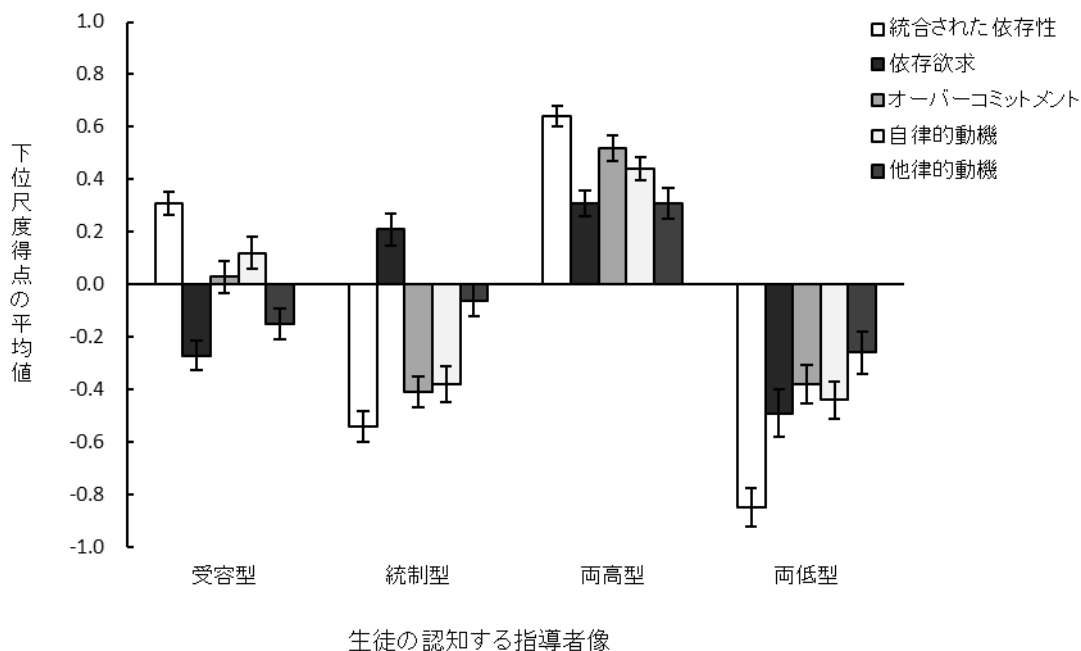


Figure1 生徒の認知する指導者像ごとの下位尺度得点の平均値(標準誤差)の比較

(5) 生徒の心理的成長に関する諸研究

最後に、当初予定して質的調査に関しては、本研究過程において質的データの収集方法や分析観点などをより洗練させていく必要性がでてきたため、今回は、当事者の語りやふりかえりをもとに、心理的成長に焦点を当てた調査を積み重ねていくことを優先させた。

まず、スノースポーツ実習に参加した大学生を対象にした調査では、活動に対する自我関与が低い者より高い者のほうが自己効力感の向上がみられ、「リラックス」、「好奇心」、「楽しさ」だけでなく、時に「苦しさ」の中で自我を関与させつつ課題を乗り越えるという体験が「自信」となり、自己効力感の変化をもたらしている可能性が示唆された。また、身体運動をとまなう自然体験活動を通じたエンカウンターグループへの参加者を対象にした調査では、さまざまな

身体活動を体験し、非構成的エンカウンターグループによって自己のふりかえりが促進され、自己効力感や自己成長性の向上に寄与していた可能性が示された。さらに、子ども達との自然体験活動を通じた大学生の心理的成長について、大学生のふりかえりをもとに調査したところ、大学生が直面したつまずきを克服しようと試行錯誤し、活動に取り組んで行く過程の中に、彼らの成長をみてとることができた。最後に、スポーツ競技場における心と身体について、アスリートに対する心理サポートの事例をもとに、臨床心理学的な視点から検討を行った。

以上の諸研究では、競技場面で活動するアスリートから、授業として運動・スポーツ活動に取り組む大学生までの心理的成長について、幅広く検討することができた。その中で個人の体験のふりかえりや語りをもとに、心理的成長を読み解いていくことの重要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計7件)

松井幸太、自然体験活動を通じたエンカウンターグループの試み 参加者のふりかえりと自己成長性および自己効力感からの検討、研究紀要、査読無、20巻、2019、p.109-126

松井幸太、子ども達との自然体験活動を通じた大学生の学びと心理的成長 KUIS学修ベンチマークおよび自己効力感、自己成長性からの検討、地域創生研究叢書、査読無、12巻、2019
坂中尚哉・鈴木壮・関口邦子・松井幸太、スポーツと心理臨床 日本心理臨床学会におけるスポーツ心理臨床の探求、関西国際大学心理臨床研究、査読無、2巻、2019、p.35-47

坂中尚哉・松井幸太、カンボジア・グローバルスタディプログラムのフィールド調査を踏まえて カンボジア内戦経験者の語り、多文化共生研究所叢書、査読無、2019

松井幸太、雪上実習における体験過程と自己概念の変化 自我関与からみた感情体験と自己効力感および自己成長性の検討、研究紀要、査読無、19巻、2018、p.111-124

松井幸太、子ども達との自然体験活動を通じた大学生の学びと地域貢献、地域創生研究叢書、査読無、11巻、2018、p.27-42

松井幸太、運動部活動に対するオーバーコミットメントと生徒の参加動機 性別・学年・競技水準・競技種目からの検討、聖泉論叢、査読無、23巻、2016、p.53-64

[学会発表](計6件)

松井幸太、自然体験活動における体験過程と自己効力感および自己成長性 エンカウンターグループ体験の試みとして、日本スポーツ心理学会第45回大会、2018

坂中尚哉・松井幸太、スポーツと心理臨床(2)、日本心理臨床学会第37回大会、2018

松井幸太、自然体験活動を通じたエンカウンターグループの実践 参加者の自己成長性と自己効力感からの検討、鳴門生徒指導学会第28回大会、2018

松井幸太、雪上実習における体験過程と自己概念の変化 感情体験と自我関与からみた自己効力感と自己成長性の検討、日本スポーツ心理学会第44回大会、2017

松井幸太、大学生・院生における自然体験活動の心理教育的意義の探索 野外活動とエンカウンター・グループ体験による試み、日本心理臨床学会第36回大会、2017

Kota Matsui, Students' psychological growth in high school athletic clubs: Role of students' perceptions of teacher, ISSP 14th World Congress Sevilla, 2017

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。